内科を受診する脳腫瘍の実際と最新の脳腫瘍手術

北井先生は福井県内数多くの脳腫瘍患者を治療されてきたが、その多くの症例が内科を初診とする患者であった。こうした経験を踏まえ、内科医が見過ごしやすい所見や症状を具体的事例を挙げて紹介し、潜在する患者を拾い上げ早期診断、早期治療の重要性を説かれた。成人の脳腫瘍は、グリオーマ、髄膜腫、下垂体腫瘍が三大疾患であるが、髄膜腫やグリオーマは慢性で緩徐な進行であることが多く、この間、胃腸炎や自律神経失調症、心身症として治療され見逃されていることに注意が必要という。また頭痛の鑑別は難しいが、慢性的頭痛は必ず念頭に置かなければならず、当然、視野障害等の脳局所症状が出現すれば必ず精査が必要とのことであった。

下垂体腫瘍では、特に成長ホルモン産生下垂体腺腫についての早期発見と治療の重要性を強調された。成長ホルモンの過剰分泌が長期に続くと様々な合併症により寿命が 10 年以上短くなる。特に大腸がんなどの悪性腫瘍の発生や心筋梗塞、脳血管障害の合併は有名である。街中にもアクロメガリー様顔貌の人が散見され、これら人々を内科医が注意をすれば早期診断・治療に繋がるため、家庭医や一般内科医の重要性を強調されていた。

後半は、脳腫瘍の治療、特に最新の手術治療についてビデオを使って紹介された。

グリオーマは腫瘍が正常脳に染み込む様に成長し、正常脳との境界が不明瞭で腫瘍を完全に摘出することは困難な腫瘍である。このため 5-ALA による蛍光プローブで腫瘍を染めて摘出する方法（術中蛍光診断）や、さらに腫瘍や重要な脳領域、神経線維等の位置情報を術中に示す術中に示すナビゲーションシステムによる手術の紹介があった。さらに言語野近傍に発生したグリオーマを摘出するためには言語野の損傷を避けるため会話をしながら手術を行う覚醒下手術等も紹介された。

こうした最新の手術治療のため、福井県内の内刃物とメガネ枠の技術を組合せた脳神経外科用剪刀等を開発して地域産業を創生していることを紹介し、熱の籠った迫力ある講演を締めくくった。

野村内科医院院長　野村　元積